

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論 文 題 目
Dissertation title

日本語の連体格助詞「の」と韓国語の冠形格助詞「의(ui)」の対照研究

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and
Cooperation,
Hiroshima University
博士課程後期 教育文化専攻
Doctoral Program Division of Educational Development and
Cultural and Regional Studies
学生番号 D102365
Student ID No.
氏 名 林 仙雅 □
Name Seal

本論文は日本語と韓国語の文学作品の原作とその翻訳を使い、「の」と「의」の対照を行った。本研究の目的は名詞を修飾する構造を作る「の」と「의」がどのような名詞を結びつけるかについて日本語と韓国語の違いを見ることである。

本論文は8章で構成されている。

第1章では、研究の背景及び目的、方法について述べた。

第2章では、「の」と「의」の研究、および「の」と「의」の対照研究、名詞の動詞化、「の」と「의」が2回以上現れる形式に関する先行研究を検討し、そこから見られた問題点や課題、本研究の意義について述べた。既存の「の」と「의」の対照研究では日本語から見て韓国語はどのように対応するかの研究が主流であって、本研究のように量的データから日本語と韓国語の原作における N_1 と N_2 の表れ、また、「 N_1 の N_2 」と「 N_1 의 N_2 」の翻訳、さらに原作の翻訳を総合して「の」と「의」の対照を行った研究は無いに等しい点、「 N_1 の N_2 」と「 N_1 의 N_2 」の「動詞化」においてどのような動詞が使われているか、また、動詞化タイプの特徴について見た点、さらに、「の」と「의」が2回以上現れる形式において連結された名詞の組み合わせについて考察した点等にその意義があると主張した。

第3章では、本研究で使う調査資料とデータの分類基準、本研究の名詞を分類した標本の『分類語彙表』などについて述べた。3.5では本研究で収集した全体のデータの「 N_1 の N_2 」と「 N_1 의 N_2 」の翻訳形式について各翻訳形式ごとに説明を加えた。

第4章は、動詞を用いて翻訳された「動詞化」翻訳形式に注目し、どのような場合「 N_1 の N_2 」と「 N_1 의 N_2 」の翻訳が「動詞化」として現れるか、その特徴は何かについて考察した。

「 N_1 の N_2 」の翻訳(J→K)と「 N_1 의 N_2 」の翻訳(K→J)に共通する動詞化タイプ別に比較した結果、意味的に対応する動詞が使われて、かつ、共通する特徴も見受けられた。だが、その翻訳率を比較すると同様ではないことが本研究では分かった。一方、一見翻訳された形は対応しているように見えるが、実際用例を見ると日本語と韓国語では用法が異なっているが見られた。「 N_1 의 N_2 」の翻訳(K→J)の動詞化タイプの「名詞+に+動詞(+名詞)」では、受身的表現を使い、 N_1 がいわば主語に分類される翻訳が多く見られた。また、「名詞+の+動詞(+名詞)」動詞化タイプもいわゆる主格の「の」の役割をするものがほとんどであった。従って、「 N_1 의 N_2 」の翻訳(K→J)の動詞化タイプの多くは主語を用いて翻訳されると思われる。

る。そして、「N₁의 N₂」の翻訳(K→J)の動詞化タイプには「N₁의 N₂」の原作におけるN₂が動的な意味を表す名詞が多く見られた。即ち、「N₁의 N₂」(K→J)の翻訳の動詞化はある程度特徴が見られた。しかしながら、「N₁のN₂」の翻訳(J→K)の動詞化は多様で纏まった特徴が見られない。従って、「N₁의 N₂」の翻訳(K→J)の動詞化タイプは文脈によって多様に仕分けられるのではないかと思われる。

第5章では、日本語と韓国語のN₁とN₂の組み合わせという側面から、「の」と「의」で結びつけられる名詞の違いを考察した。本研究の全体のデータから「N₁のN₂」と「N₁의 N₂」のN₁名詞類を大きく「人名詞」、「場所名詞」、「物名詞」に分類し、N₂を国立国語研究所(2004)『分類語彙表』に基づき分類した。これに従って、原作での「N₁のN₂」と「N₁의 N₂」のN₁とN₂の表れを見た。ここで、日韓の出現率を比較した結果、差が見られた。また、「N₁のN₂」と「N₁의 N₂」の翻訳形式の翻訳率を出した。これから、原作と翻訳形式を照らし合わせてN₁とN₂の結ばれ易さ、結ばれ難さについて考察した。

「の」と「의」により結びつけられる名詞に差が生じるかについて考察した。その結果、N₁が「場所名詞」のとき、日本語においては「場所名詞」と「1.14力」「1.57生命」が連結されない傾向にあり、韓国語においては「場所名詞」と「1.12存在」「1.14力」が連結されない傾向にあると思われる。これらの項目は、おそらく「場所名詞」と連結する可能性は低いと示唆される。また、N₁が「物名詞」のとき、日本語においては「物名詞」と「1.10事柄」「1.12存在」「1.25公私」「1.35交わり」「1.36待遇」「1.53生物」「1.55動物」が連結されない傾向にあり、韓国語においては「物名詞」と「1.10事柄」「1.12存在」「1.25公私」「1.35交わり」「1.36待遇」「1.53生物」「1.55動物」が連結されない傾向にあると思われる。これらの項目は、おそらく「物名詞」と連結する可能性は低いと示唆される。また、「N₁のN₂」と「N₁의 N₂」の原作と翻訳を照らし合わせた結果、N₁が「人名詞」のときのN₁とN₂の難易度は、韓国語で「人名詞」と結びつき易いと考えられるものは、「1.15作用」「1.35交わり」である。韓国語で「人名詞」と結びつき難いと考えられるものは、「1.17空間」「1.23人物」「1.24成員」「1.27機関」である。日本語で「人名詞」と結びつき易いと考えられるものは、「1.11類」「1.17空間」「1.27機関」「1.24成員」「1.44住居」「1.45道具」「1.46機械」である。日本語で「人名詞」と結びつき難いと考えられるものは、「1.10事柄」「1.15作用」「1.18形」「1.35交わり」「1.54植物」である。N₁が「場所名詞」のときのN₁とN₂の難易度は、韓国語で「場所名詞」と結びつき易いと考えられるものは、「1.13様相」「1.15作用」「1.19量」「1.30心」「1.32芸術」「1.52天地」「1.54植物」である。韓国語で「場所名詞」と結びつき難いと考えられるものは、「1.12存在」「1.13様相」「1.26社会」「1.32芸術」「1.35交わり」「1.38事業」「1.40物品」「1.43食料」「1.54植物」である。日本語で「場所名詞」と結びつき易いと考えられるものは、「1.13様相」「1.17空間」「1.18形」「1.26社会」「1.32芸術」「1.54植物」である。日本語で「場所名詞」と結びつき難いと考えられるものは、「1.15作用」「1.16時間」「1.22仲間」「1.30心」「1.32芸術」「1.33生活」「1.50自然」「1.51物質」「1.52天地」「1.53生物」である。N₁が「物名詞」のときのN₁とN₂の難易度は、韓国語で「物名詞」と結びつき易いと考えられるものは、「1.11類」「1.14力」「1.18形」「1.40物品」である。韓国語で「物名詞」と結びつき難いと考えられるものは、「1.20人間」「1.21家族」「1.22仲間」「1.23人物」「1.30心」「1.32芸術」「1.33生活」「1.51物質」「1.52天地」「1.54植物」「1.56身体」である。日本語で「物名詞」と結びつき易いと考えられるものは、「1.17空間」である。日本語で「物名詞」と結びつき難いと考えられるものは、「1.10事柄」「1.11類」「1.12存在」「1.16時間」「1.18形」「1.44住居」である。

以上の結果から、N₁とN₂の表れで結ばれ難いと思われる項目が重なっていた。それは、韓

国語のN₁が「場所名詞」のとき、N₂が「1.12存在」である。また、日本語のN₁が「物名詞」のとき、N₂が「1.10事柄」「1.12存在」である。これらの項目は、おそらくN₁と連結する可能性が低いと示唆される。

第6章では、N₁とN₂の意味関係に直接起因して「N₁のN₂」と「N₁의N₂」が対応せず翻訳された用例と対応し翻訳された用例を比較し、その特徴をまとめた。「N₁의N₂」のN₁とN₂の意味関係は「N₁のN₂」のN₁とN₂の意味関係に比べて比較的、纏まった特徴が見られた。特に、「人名詞(N₁)+의+N₂」の場合N₁とN₂の意味関係が「主体(N₁)-主体から発せられた生産物(N₂)」であれば「名詞+の+名詞」に翻訳される傾向にあった。

N₁が「場所名詞」の場合は「N₁のN₂」と「N₁의N₂」のN₁とN₂の意味関係はN₁が特定可能な範囲であれば対応し翻訳され、N₁が特定しにくい範囲だと対応せず翻訳されるという共通の特徴が見られた。それ以外には、「N₁のN₂」と「N₁의N₂」のN₁とN₂の意味関係において共通点は見られなかった。一方、N₁が「人名詞」の場合、韓国語の原文の場合N₁とN₂が文脈上どのように解釈されるかよりは、主体から発せられたものであれば、「の」で翻訳できる。ところが、そうではなくちゃんとN₂が作られたものでないと対応し翻訳されず、その他に翻訳されると見られた。それに比べて日本語の場合は韓国語ほどはっきりした類型はあまり見られなかった。

第7章では、まず、原作での「の」と「의」が2回現れる形式で共通した名詞類の結合が見られた。その共通の結合は4種が見られた。これを山梨(2004)が挙げた2種の所有表現の「連鎖的所有表現」と「入れ子式所有表現」が見られるかを検証しながら分析した。その結果、4タイプの傾向が見られた。まず、山梨(2004)の2種のタイプどちらも当てはまらないもの、「連鎖的所有表現」に分類されるもの、「入れ子式所有表現」分類されるもの、「連鎖的所有表現」と「入れ子式所有表現」が両方見られたものに分けられることが分かった。しかし、山梨(2004)の分類だけでは当てはまらないものも見られたので、これ以上の分析はできない。さらに、「の」と「의」が2回、3回、4回現れる形式がどのように翻訳されているかを見た。「の」と「의」が現れる数が多くなるにつれ、対応し翻訳される可能性は低くなることが分かった。また、N₁を「人名詞」、「場所名詞」、「物名詞」に固定し、再分類を行い考察した。N₁が「人名詞」と「場所名詞」の場合、日韓共に現れた「の」と「의」の2回現れる形式の3つの名詞の連結について分析した。その結果、日韓のN₂とN₃に現れる名詞類を比較したところ、韓国語のN₂とN₃は日本語のN₂とN₃にほとんど含まれることが確認できた。だが、日本語のN₂とN₃に現れる名詞類を比較、また、韓国語のN₂とN₃に現れる名詞類を比較した結果、日韓の「の」と「의」が2回以上現れる形式による名詞の連結には独自の傾向が見られた。N₁が「物名詞」の場合、「의」のが2回以上現れる形式は本研究のデータからは1例も見つからなかった。従って、N₁が「物名詞」の場合、「の」が2回以上現れる形式構造のみ分析した。日本語のN₂とN₃に現れる名詞類を比較した結果、「の」が2回現れる形式による名詞の連結には重なるものがなかった。また、N₁が「人名詞」、「場所名詞」、「物名詞」の場合、N₂とN₃が翻訳された名詞類は日韓共に限定されることが分かった。一方、N₁が「人名詞」の場合、「の」と「의」が2回現れる形式の3つの名詞の連結の翻訳において対応し翻訳された形式ではN₂に「1.56身体」の名詞類が位置すると日韓共に翻訳されるという特徴が見られた。

第8章では、本研究の結論として、各章の主要な内容をまとめた。また、本研究の総合考察を述べ、最後に今後の課題について述べた。

備考 論文の要旨はA4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.